

団地で広げる “米ニケーション”の輪

東京都町田市の町田山崎団地は、
広々とした敷地に中層の建物が並ぶ大規模団地。
その敷地の一部を使って、居住者のグループがコメ作りを楽しんでいる。
水田を通じたエコ活動で住民の新しいコミュニケーションが生まれつつある。

★以外の写真=大塚 俊 取材・文=船木麻里

Case
1

まちだやまざき
町田山崎団地
東京・町田市



はだしで、
ドロドロになってコメ作り
笑顔があふれている



約110㎡の水田でうるち米ともち米を育てる。うるち米の品種は「彩(さい)のかがやき」。埼玉県で作られた品種で、今田さんが「町田と気候風土に近いほうがいいのでは」と決めた。



「ここは浅いわね」

「深いところもあるわよ、気を付けて」

ひざまで水田に漬かって作業をするのは、町田山崎団地に住む今田隆さんら6人のグループ。田植への済んだ水田に浮かぶゴミを取り除き、肥料をまくのが今日の作業だ。

5月にできたばかりの水田は、場所によって浅かったり深かったり。底が見えないので、思わぬ深みに足をとられ、バランスを崩しそうになることも。「尻もちついても、シリませーん。」

ハハハッ」

グループのリーダー、小寺法子さんの威勢のいい声に続き、メンバーの笑い声がのどかな田んぼに響く。手のひらほどもあるカエルもひよっこり姿を現して、メンバーを驚かせていた。

団地の中に田んぼのある風景を

東京都町田市にある町田山崎団地は1968(昭和43)年に入居が始まった。小田急線町田駅からバスで約15分、全3920戸の大規模団地の一面に水田はある。110㎡ほどの水田は、あぜで2つに仕切られ、うるち米ともち米の苗が、夏の日差しを浴びて、力強く成長している。

水田を作った場所は、将来の道路予定地として、建物を設けていないスペース。谷間になっていて、町田山崎団地ができた1968年頃には「ジャブジャブ池」と呼ばれる池があった。当時入居した小寺さんは「子どもの遊び場になっていたんですよ」と懐かしむ。

その後、池の周辺が大型ゴミの不法投棄場所になり、悪臭が出るなどの苦情が出たことなどから埋

め立てられ空き地になっていた。

2年前、防災や地域コミュニティの形成といった観点から、この場所の有効利用をUR都市機構が検討した際、クラインガルテン(貸し菜園)を作る計画が持ち上がった。「それなら田んぼも作ってほしい」と、小寺さんや自治会長の吉岡栄一郎さんたちが、UR都市機構へ熱心に働き掛けた。実は小寺さんたちは、2年前から団地に隣接する小学校の敷地内に水田を作り、子どもたちに稲作体験をさせるという取り組みを行っていた。

「田植えや草取りといった作業も子どもたちと、笑いながら楽しんでやりました。収穫したイネのみを子どもたちに見せて、これが白いコメになるんだよ」と言ったときの驚いた顔といったら。さらに収穫祭でお餅を頬張る子どもたちの顔を見たら、苦労も忘れてしましました。(小寺さん)

町田山崎団地でもそんな笑顔を見たい、と考えた小寺さんたちの熱意にUR都市機構も応え、一足先にできていたクラインガルテンの隣に水田を設けた。

今田隆さん(写真一番左)たち6人は町田山崎団地でコメ作りを楽しむ。指導する近隣農家の白井さん(写真左から4番目)は、「ここなら無農薬でおいしい米ができる」と太鼓判を押す

菜園、水田… 次はヤギが来る?!

町田山崎団地の水田とクラインガルテンの横には、草が生い茂ったスペースが広がっている。その除草にヤギを活用するプランが具体化している。

現在、UR都市機構技術研究所(東京・八王子市)に試験導入し、安全性などを確認中で、早ければ9月末にも、町田山崎団地でヤギによる除草の実証実験を始める予定だ。

ヤギによる除草は、機械を使った除草と比較すると二酸化炭素排出量が非常に少なく、地球に優しい。また、身近にヤギの暮らしが目に入ってくる環境は、団地住民にとって癒やしの効果も期待できる。



★
技術研究所で飼育実験中のヤギ(上)。草が生い茂った町田山崎団地のヤギの放牧予定地(下)

水田の隣のクラインガルテンでは団地の住民が野菜作りを楽しむ。夏の日差しを浴びてトマト、ピーマン、ナス、キュウリ、ネギなどいろいろな野菜が育っている。20区画を募集したが、満杯になっているので、近くエリアを広げる予定だ

トマト、ピーマン、ナス—— クラインガルテン 貸し菜園も大豊作!



UR都市機構のバックアップがあったとはいえ、これまでの作業は決して楽なものではなかった。水田が狭く農機を入れられなかったため、人の手で作業を進めなくてはならないからだ。

収穫はお餅やおにぎりに

「今回、田んぼを作った場所には自然の湧き水もあります。そして、町田山崎団地は建物の間隔が広いので、風通しもよく、日照も十分です。こうした環境ならいい田んぼができるはず。団地のど真ん中に田んぼがある。いいじゃないですか。そんなのどかな風景を、ここに作りたいと思いついてね」と吉岡さんは話す。

水田は保水が大切。UR都市機構では、そのために水田の土の下にビニールシートを全面に敷くプランを立てた。しかし、今田さんたちの「ビニールシートがなくとも大丈夫ではないか」という意見を取り入れて、今年は半分は敷いて様子を見ることにした。「実際に農作業をする方の意見が一番大事です」とUR都市機構の担当者は話す。

「できたばかりの田んぼの中には、ざか石ころだらけで、田植えの準備の最初の2日間はひたすら石拾い。それと草刈りも大変。もともと草がはびこっていた場所なので、いくら草刈りをしても次々に生えてくる。あぜだけでなく、田んぼの中にも生えてくるんですよ。田んぼの周りに石ころと刈った草の山ができるほど。今もまた石ころと草との闘いです」(小寺さん)

近隣農家の指導を仰ぎつつ、農作業は基本的に6人でやってきました。唯一の男性メンバー、今田さんは土壌に適した苗を探したり、収穫後の脱穀に使う千歯こきの刃を福井県の農家まで出掛け、調達してきたりと小学校でのコマ作りのおかげで大活躍。吉岡さんは、今田さんが持ち帰った千歯こきの刃を台に取り付けるなど、さまざまな場面でバックアップしている。

作業メンバーは当初今田さんたち3人。とても足りないもので、団地新聞で募集したり、団地のボランティアアサークルにも呼び掛けた結果、3人が加わり、現在の6人になった。

「私が田んぼでナマズを飼おうか」と言うと、女性陣から「えっ、イヤよ、そんなの。却下!」と総スカン。全員、田んぼに関しては素人だけど、あんなにこうだと知恵や意見を出し合って、楽しくやっていますよ」と今田さんは笑顔で話す。作業が終わるとあぜに座って、持ち寄ったお茶やお菓子でワイワイやるのも大きな楽しみだ。

「私が田んぼでナマズを飼おうか」と言うと、女性陣から「えっ、イヤよ、そんなの。却下!」と総スカン。全員、田んぼに関しては素人だけど、あんなにこうだと知恵や意見を出し合って、楽しくやっていますよ」と今田さんは笑顔で話す。作業が終わるとあぜに座って、持ち寄ったお茶やお菓子でワイワイやるのも大きな楽しみだ。

ぬかは肥料や洗顔に、わらは正月飾りに 収穫したイネは捨てる場所がない



収穫はごはんとして食べるだけでなく、もみ、ぬか、わらも残らず活用する。例えばわらは正月飾りに使う予定だ。今年は、昨年、小学校で取れたコマのぬかを肥料として使っている

小学校で子どもと交流

(写真提供:今田隆さん)



★
昨年は、町田市立七国山小学校の敷地の一部を借りて水田を作った。田植えから収穫まで小学生とともに楽しんだ



広々とした敷地に、余裕を持った間隔で建物が並ぶ町田山崎団地



道路の予定地に、右手前から水田、クラインガルテン、ヤギを飼う計画もある草場が並ぶ

「私が田んぼでナマズを飼おうか」と言うと、女性陣から「えっ、イヤよ、そんなの。却下!」と総スカン。全員、田んぼに関しては素人だけど、あんなにこうだと知恵や意見を出し合って、楽しくやっていますよ」と今田さんは笑顔で話す。作業が終わるとあぜに座って、持ち寄ったお茶やお菓子でワイワイやるのも大きな楽しみだ。

「私が田んぼでナマズを飼おうか」と言うと、女性陣から「えっ、イヤよ、そんなの。却下!」と総スカン。全員、田んぼに関しては素人だけど、あんなにこうだと知恵や意見を出し合って、楽しくやっていますよ」と今田さんは笑顔で話す。作業が終わるとあぜに座って、持ち寄ったお茶やお菓子でワイワイやるのも大きな楽しみだ。